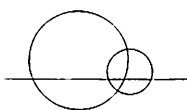


〔講演会〕



東亜同文書院大学のあゆみと中国大調査旅行

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

【藤田】 それでは今度は私の番であります。もつと長く小崎先生にお話ししていただくのが正當かと思いましたが、ただいま小崎先生のお話にもありました点がいくつかございましたので、そういうところは少しカットして、始めさせていただきます。

タイトルは「東亜同文書院大学の歩みと中国大調査旅行」ではありますけど、今回はハルピン学院、それから建国大学の方々をお迎えいたしました。次のいくつかのスライドはそちらのほうでありまして、会場の入口のほう、あるいは奥のほうに展示してありますのでご覧ください。これは先ほどございました後藤新平さんの写真です。これがハルピン学院の校舎で、今でも残っているというお話を先ほど谷先生のほうからお聞きしました。こういう形で全体の人達が一堂に会した写真です。これは今でも続いている慰霊祭と言いますか、先ほどお話がありましたところですが、私も参加させていただいたことがあり、会長さんとお話をしたことがあります。後ろのほうに掲示してあります文書に來歴がいろいろ書いてございます。これは建国大学のほうです。こういう校舎でありまして、日本が作った大きな都市計画の、一番広い道路の南のほうに立地しました。今、町も非常にきれいになっていて、きれいな森はこの方々が植えられたんだと先ほど初めてお聞きしました。農業の実習をこういう形でやっておられたようです。

次は東亜同文書院。今、小崎先生のお話

ました3番目の、本格的に書院が発展した時期の大きなキャンパスであります。ちょうど今、豊橋にあります愛大の5万坪ほどのキャンパスとよく似ていまして、そういう意味で言うと同じようなスケールで建てられたのかなという気がします。

先ほどもございました書院を作った3人のキーパーソンですね。近衛篤磨、荒尾精、それから根津一。これらの方が日清貿易研究所から構想を得られました。これは歴代の院長の方々です。近衛文隆。それから大内学長。初めて大学に昇格した時の最初の学長さんです。そしてこれが最後の本間院長で、愛知大学を作られた方です。そういうわけで本学でも本間先生を顕彰しつつあります。われわれの愛大は愛知県にありますけど、先ほどの荒尾精という方が愛知県生まれの方なんです。尾張藩生まれです。熊本の鎮台に行った時に中国情報を聞きました。当時初めての日本人の国際商人である岸田吟香の、これが若い時。これは大成してからの顔ですね。江戸時代の終わりに目を悪くして、横浜の目医者へボンにお会いし、そこで目薬の作り方等を教えてもらい、『和英語林集成』作成のためその活字が上海にしか無いというので上海へ行き、そこでそういう目薬を売ってお金を儲けたという方です。その方のお子さんが岸田劉生という方で、そのお弟子さんが豊橋の豊川堂という書店を經營し、愛大のロゴを作ったという点で、関係がありますよというところをちょっとお示ししようと思いました。

私がこの研究を進めたのはもうだいぶ前、1980年代に入ってからなんですけど、最初に書院の卒業生から教えていただいたのが「蘭州紀要」という生原稿のコピーでした。これはいったい何だろうとご相談を受けて私もさっぱり最初は分からなくて、そこから大旅行の調査研究を始めたという最初のものでした。その話はまた別にあるんですけど、先ほどの荒尾精は中国へ渡って、岸田吟香のスポンサーとして漢口でも本屋さんを開いて中国中のいろんな書籍を集め、当時日本人で大陸へ渡ってきた青年達を集めて、お前さんは北、西、南とかいろんなところへ行って調査してこいという方法をとったんですけど、やっぱりトレーニング不十分で多くは失敗してしまいました。そこでもう1回本国へ戻って、やっぱりきちんとした貿易取引のできる人を養成する必要があると。それで構想を抱き、1890年に日清貿易研究所を開設したわけです。その荒尾精の作品を根津院長がまとめて、『清国通商綜覧』という本を書きます。その中に出てくる地名を地図の上に落とすとこんなふうになります。中国中、ここにはこんな商品がある、あちらにはこんな商品がある。今の政府は欧米志向だけど隣の中国にも目を向けるべきだという主張をしたわけです。これは銅の製品をモデルにした商品見本であります。

1890年、上海にそのような貿易担当のできる人材養成の学校として、日清貿易研究所がつくられますが、日清戦争が始まると引揚げざるをえなくなります。そして、東亜会と同文会という組織が日清戦争のあと作られます。この頃はいろんなイデオロギーを持った団体も生まれますけど、この2つは比較的その中では開明的でありました。とりわけ教育文化交流事業を通して日中間を発展させるべきだという同文会を中心にして、近衛篤磨公が理事長になりました。これが東亜同文会です。最初に霞山会の星さんが挨拶をいたしましたけど、そこに今引き継がれてるわけです。

このような目標のために教育文化事業を進めて

いくというので、東亜同文書院が1901年にできます。最初は1900年の南京同文書院ですけれども。義和団の乱で上海へ移って開学しました。その間にはいろいろ校舎の建設地をめぐって、現地で交渉がありました。本日一番最後に少しご挨拶していただきますけど、金沢におられる三田さんのお話によれば、近衛篤磨が南京に進出していた本願寺校舎を交渉したりしたというプロセスがありました。これは日清貿易研究所の入学式。胸に大きな名前を書いて、まるで逮捕状みたいな感じがしますが、今の時代には貴重な写真です。もうこんなふうに変色しています。当時の写真というのは非常に珍しいですね。これは日清貿易研究所時代の先生方と事務職の方々の写真であります。これも顔がはっきり映らないぐらいに変色しております。

東亜同文会は東京にまず、中国（清国）の留学生を集めた東京同文書院というのを作ります。そのあと隣の朝鮮半島も教育レベルが非常に低いから列強から狙われるというわけで、この3つの学校を作るわけです。そしてそのあとに、東亜同文書院を先ほどのように上海に作ったのです。のちにいろいろな中国人の人達相手の学校を作ったり、ずっとあとには日本の経済専門、工業専門等の学校を併せて経営したりしました。書院では、途中で農工科という工学系の課程を一時作った時期もありました。また、中華学生部も設け、中国人学生も受け入れました。これが最初の頃のカリキュラムでありまして、このように内容が書いてあります。これからおわかりのように、日中貿易の取引ができるような中国語と商取引関係の科目に特化したビジネススクールであったわけです。

書院の学生達は、県の給費生として各県から2名ずつ試験で選抜されました。その後のハルピン学院とか建国大学でも同じようなシステムが導入されました。どの県も激戦でしたから、後にやっぱり私費を出してでも進学したいという方々がおられて、その時代になりますと私費生は都市部に

集中します。しかし、私費生の試験も30人ぐらい募集するのに3,000人押しかけたというような形でやっぱり激戦でした。書院に入ってどんな夢を持ったかをアンケート調査でみますと、中国で働く、骨を埋めたいとか、日本と中国、アジアのためとか、中国人のためとか、中国を見てみたいとか、中国語を勉強したいとか、有能なビジネスマンになりたいとかいうような大きな夢を皆さん持っておられたということが分かります。

そして卒業生ですが、一番最初に名前を挙げた方が山田良政兄弟で、これはお兄さんのほうですけど、孫文に非常に惚れまして、南京同文書院の先生もやりながら、孫文がハワイにいる時に一斉蜂起を呼びかけてそれに参加するために広州近くの惠州に行ったんですね。そこで戦死した。これを知って感銘した孫文は大変に尊敬の意を込めていくつかの墓碑を作って贈ったのです。出身地が青森県の弘前ですから、その一つはそこのお寺に祀ってあります。弟さんが純三郎と言って、兄の意志を継ぎ孫文の実質的な秘書になります。その過程の中で、多くの資料が純三郎のもとに集まりました。それをその息子さんと書院の卒業生の順造さんから、本学に一括寄贈していただきました。したがって孫文関係の生資料は、本学が現在の日本の中では一番たくさん持っています。そういう点から展示施設を持っていますので、ご覧になりたい方は本学豊橋校舎の東亜同文書院大学記念センターというのかございますので、そちらのほうへぜひ見にきていただけたらと思います。その一部を隣の展示室で現在展示しておりますので、それもお覧下さい。

卒業生の方々をさらにみてみましょう、白岩竜平、この人は南京同文書院の卒業生で、揚子江（今の長江）の汽船航路を開拓した人。実業家の方です。これは先ほど小崎先生のお話でふれられた林出賢次郎。西域のシルクロードのほうに奥まで行って2年間調査してきた人です。この人は大倉さんと言って、大きく紙の会社を経営されてい

ます。この中山優という方は書院におられた方ですけど、授業に出ずほとんど図書館で自分で勉強したという方で、後に建国大学を作る時に貢献しています。この清水董三も中国北京で学校を作られた。外交界では石射猪太郎が外務省の東亜局長になっています。この方も、書院生の大旅行記録の中に出てきます。その旅行記を見ると、大旅行中の学生が吉林省の領事館でお会いしたという記録が複数みられます。そういう点を見ると、なかなか開明的な外交官の方であったようです。中国との戦争中に相手方と平和交渉をし、戦後は山梨県の副知事になった方もいます。これは中華学生部の中国人学生のうちの3人です。名を成した方々であります。その頃中国で活躍された方、あるいは早めに亡くなってしまった方もおられます。個別の話はちょっと省きます。愛知大学に中国の代表団長で来られた方も、「私も書院出だ」という方がおられました。これは小説家の大城立裕先生ですね。沖縄の方です。これはインタビューのためお会いした時の写真です。

一方、本命のビジネスマンの卒業生の就職先を見ますと、商社ではこんなに大手の会社にたくさん入っております。それから海運関係。今では無くなっていますが、日本と結んだりして当時としては大きな中国の会社でした。それから紡績関係とか金融、先ほどの横浜正金銀行というのが出てきます。満州国関係も。これも挙げたらきりがありません。それから報道関係ですね、ジャーナリズムの世界。これは大陸のほうの報道関係です。あと日本ではこういうように各新聞社が並びます。外交官では今日おみえの小崎先生も外交官であります。先ほどの林出さんを始めずいぶんたくさんの方がおられます。これは学界。研究者として、戦後80数人が大学の先生になっておられます。本日おみえの宮田先生は、NHKの中国語講座でも活躍されておられました。

書院教育の中心はやっぱり中国語と、もう1つは中国を知るという2点でした。しかし、民間の

学校ですからお金が無かったんですね。そこで最初の修学旅行形態の旅行に対する不満がたくさん出てきます。俺達はずっと奥地や、いろいろなところへ行きたいのだと。そんな時に先ほどお話がありました2期生の方々5人が根津院長に呼ばれて、日英同盟によるイギリスからの要請に応じて西域へ調査に行ってくれないかと。その2期生のうちの波多野養作という方が、非常に細かな日記を書いておられます。こういう服装をして、2年間かけて行って帰ってくる。途中で2度ほど死にそうな病気になり、外国人の宣教師に助けられています。こういう道ですから、ちょっとでも馬車に乗るとすぐ痺になってしまう。それからマalariaにかかって1週間熱が出て記録が無くなったり、なかなか大変だったみたいです。後に鉱山に就職しました。他の卒業生の方々を訪問している時、この写真が出てきて、あ、林出さんだとすぐわかりました。この方は日本が中国と戦争を始めた時に、「軍部の馬鹿野郎」というふうに言ってピストル自殺をしています。そのことを娘さんが覚えていて、別の写真もいろいろ提供していただいたりしたことがございます。その5人の西域調査の軌跡です。これが西域の新疆。別々のコースをとっています。これは林出さん。行って帰ってきたらまた向こうの蒙古の王様から教育担当にぜひ来てくれというのでまた出かけていったんですね。すごい方です。帰ってからは新生満州国の溥儀の面倒見をずっとやった。しかし、関東軍とは意向の違う面倒見をやったというので首を切られてしまいます。やっぱりそういう書院魂があったようであります。

外務省は調査旅行が成功したというので3万円を寄付してくれました。3万円だと全体の学生が3年間旅行に行けるというので、大旅行を始めたわけですね。それがなかなか評判が良く、実績もあがったというわけで、以降、書院の中でそちらに予算をつけていったのです。こういう頭陀袋でこんな形、アフリカ探検隊まがいの服装で行った

わけです。自動車が写っていますがこれは駅に行くまでで、そこから先は歩きです。3か月から6か月歩いた。これもそうです。

今日もお1人執照(ビザ)を持ってきていただいた方がおられますけど、こういう大きな執照を持って中国各地を回ったわけです。風呂敷包みの小さいやつぐらいある大きなビザですね。ところで上海という国際的な町にありましたから、書院生は時に学生服ではなくこういうような背広姿もありました。内地の学生に比べるとリベラルですね。内地とはずいぶん違った服装です。学校も非常に自由な雰囲気の学校でした。これは大旅行についても、そのコース、テーマは自由でした。どんなコースを通ったか。卒論でテーマを決めると、なるべくそこへ行くのにあっちこっち回って行ったということが分かります。いろいろなコースを通して中国を見てきた。これは外国人中心の山上の避暑地の地図です。鶏公山です。この地図は自分達が足で歩いて、1歩が何cmあるか、磁石でもって地図を作ったものです。当時中国ではほんとに地図はありませんでした。だから自分達で作ったのです。これらの成果が各省を中心にした地誌、省別全誌の中にも取り入れられております。これは途中の写真ですね。「箱根の山は～函谷関」のモデル、潼関。非常に荒れていたという記録があります。

これは軍閥に面会した時。みんな制服を着て、やっぱり敬意を表しています。軍閥と言うと何となく大泥棒の親分みたいな文字になりますけど、実際はインテリでして、混乱期の民国時代、各省を中心にしてこういう軍閥が治世をやった。戦争ばかりした人もおりますが、経済発展とか近代化を進めた人もたくさんいました。そういう人のところを訪問して揮毫などももらっている。これは埃の町。今もそうですね。黄砂が非常に多いですけど、張家口、フフホト、ここから砂漠を横断してキャラバン隊が西域へ向かう出発点の町です。ちょっとこの写真だけでは分かりにくいかも知れ

ませんが、埃の町と書いてあります。こちらは黄河をこんな筏で、あるいは羊の皮を膨らませたのをつなげて、その上に乗って下っていく時の写真です。これは今、日本人にはほとんど知られていないですけど、途中にはユートピアというデルタ地帯が形成されていて、これも外人宣教師が開発したんですね、ちょうどその頃です。それが今、大きな農地になっています。こんなところにも行ったんですね。

日本の国旗を持つてるのはナショナリズムのためだと言う人がいますが、これを持たないと外国人として認めてもらえないんですね。うまく旅をするための安全な方法であったということのようです。時には馬に乗る。あるいは川船の中で過ごしました。東南アジアもほんとにあっちこっち出かけております。当時の東南アジアには日本人もたくさんいました。そういう日本人は多く地元の人達に尊敬されて、指導者として仰がれていた。そういう点で言うと、戦争が始まる前の東南アジアの研究ってほとんど無いです。当時、日本人がずいぶん各地で活躍してたことはもっと知られてよいでしょう。しかもほとんどは植民地の中で。日露戦争に勝ったということもあったかも知れませんが、日本人に対する評価が非常に高かったわけですね。そういう点で言うと、戦争が始まって東南アジアとのいい関係が今無くなってしまった。軍国主義のやり方が非常にまずかったという気がします。調査旅行中にはこんな描写も書かれています。中国奥地の少数民族ですね。これは香港。広東では軍閥による戦争状態です。中国は先ほど軍閥の話がありましたけど、軍閥同士で非常にすさまじい権力闘争、それから中国人同士ですさまじい殺し合いをやったようです。書院の人達の記録の中にも生々しく書いてありますけど、なかなか活字にしにくいほどの凄さがあります。

当時カメラは珍しかったんですけど、各班に1台ずつライカのカメラが渡されて、皆さんこういうふうにとってきたわけでありまして。これも写り

が悪くて恐縮ですけど日本橋です。橋の上に建物が建ってる。これがベトナムに今でもありますが、当時もありました。これは古い町ユエ。ベトナム安南王朝の時、フランスが植民地にした時にはそこに王様を閉じ込めて、自分達が植民地の経営をやった。それは安南城であります。ベトナム戦争のあとに少し破壊されましたけど、今はもっと復元されています。

満州事変が起きると、さすがの民国政府も書院生に2年間ビザを発給しませんでした。そこで書院生は中国調査を予定していたのに、みんな満州しか行けなくなったのです。お陰で、結果的に満州の非常に細かな情報が集まったわけです。2年目は各県調査をやって、多くの満州各県の情報が成果として残されています。私はそれを編集して、来年の3月に印刷をして出そうと思ってます。これが2年間続いた満州の調査コースですね。大興安嶺の、虎の出る恐れのあるところを横切ってきたとか、そういうようなまあ大冒険と言いますか、そういう写真がこれです。

編集委員会が設けられ、毎年学生諸君がそういう記録をダイジェスト的に出版して出したりもしていました。この方が指導した経済地理学の馬場先生です。私も地理学をやってるんですけど、非常に共感できることが多いですね。これは呉佩孚と曹錕の揮毫です。軍閥の当時のトップスターなんですね。そういう人達に会って書いてもらった。だから泥棒の大将ではなくてインテリなんですね。字が大変達筆で上手で。これは犬養毅の筆ですね。この方も書院の非常にファンでありました。旅行内容もこちらの項目にありますように、ビジネスだけではなくて、経済的な問題から移民であるとか教育であるとか飢饉であるとか、次第にテーマが広がっていきます。次第にアカデミックな方向に向いてる。これが後に大学へ昇格する中国の総合研究のセンター、そういう形で書院が発展していったことの1つの証になります。これは地方別にテーマをまとめたものですね。



ところが戦争が激しくなりますと、奥地のほうへ行けなくなって、このチームはもう香港から北京、大連辺りぐらいですね。1チームだけ四川まで行って峨眉山まで登ってきてる。これはもう大冒険ですね。さらに厳しくなると、沿岸部だけしか旅行ができなくなって、先ほどのお話のように小崎先生の時代になるともう1人で内蒙古のほうを回られたというお話がありましたね。5期生から始まりまして43期あるいは44期の一部まで、合計しますと約700コース。それを3か月から6か月やってたわけです。これが途中の十何年分を示したものです。中国大陸、上海ですね。東南アジアとか東北から満州は省いてありますけど、こんなにたくさん歩き回っております。そういう点では、今では非常に貴重な記録がたくさんあります。当時の中国はほとんど農村でしたから、ところどころ町はありますけど、農村の人達と話し合いをしたりしてる。中国の農民はやっぱり心優しい人達が多いです。しかし中国のインテリからは差別されてる。これは今もそうですね。農民の人達との付き合いの中で、中国を非常に好きになった人が書院生には多いです。この大旅行が影響してるというふうに見ています。これはその大旅行の影響ですね。良い影響がたくさんあったというような言葉がアンケートの中に出てきます。その後の人生にも大いに影響した、良かった、満足してる、というようなことがたくさん出ております。人生の生き方にも大いに影響しているという方が多いのです。

ところが戦後になりますと、イデオロギーの世界に変わってしまった。米ソの対立の中で敗戦国日本は、イデオロギーの時代に入ってしまう。東亜同文書院の扱いも急変します。これは早稲田の安藤彦太郎という著名な先生ですが、書院は植民地の経営の先兵であるとか、スパイをしていたとかを書いています。しかし中身をしっかりと踏まえて書いたと言うよりは、イデオロギーの観念的に書いてるんじゃないかなという気がいたしま

す。そういうのが書院がスパイ学校だというふうに言われる出発点になってしまったところもあるんじゃないかなと、ちょっと残念な気がいたします。書院の人達のアンケートでスパイ学校視されてた見方についてどうか。「そんな見方はあり得ない」、「とんでもない」、「馬鹿げてる」というのが圧倒的に多いですね。一方、書院から得たものは大変あったと。書院を出た方は非常に大きな影響を受けながら、前述したように辛抱強い大旅行の経験もしたりして、非常に良かったというような答えがたくさんあります。

就職先は中国で商社、ビジネスマンが多かった。大きな町に多いというのはそういうことを表していると思います。こんな形で大きな町に就職している。仕事の内容はビジネスマンを中心に、新聞・ジャーナリズム、教員などが多いですね。

これはいつもこういう時にお話するんですけど、私がイギリスにいった時にこの話を「ザ・グレート・エスカッション・アンド・リポート・オブ・チャイナ・リトゥン・バイ・ジャパニーズ・スチューデント・オブ・トウアドウブンショイン・カレッジ・シャンハイ・オブ・トウエンティ・センチュリー」とやって、「グレート」と付けて私が予告したら、当日これがカットされてしまいました。イギリス人に言わせると、日本人がそんなことできるわけないというようなことで、「グレート」がきつとカットされたんですね。ところが講演が終わったら「グレートだよ、すごい」ということで、申し訳ないというふうに向こうの教授から釈明をされました。

書院の成果は、中国調査旅行をベースとする中国研究です。最初は『清国通商綜覧』。荒尾精が現地で資料を集め、根津院長がまとめたそうです。これが初めての中国の実態に触れた本としてベストヒットをしたわけです。日英同盟下のイギリスから外務省に調査依頼があったのを、書院院長が受け、2期生5名が西域調査をしてこれがその後の大旅行の起爆剤と言いますか契機になります。

前述のように、調査旅行の中でビジネススクールからアカデミーへ移行する。語学についても実用教育のほうから『華語萃編』という、日本人にとって初めての中国のテキストができあがる。そしてそういう調査旅行を踏まえて『支那経済全書』全12巻、これは全て当時の学生諸君が書いたものです。当時はそれに勝るものは無かった。それから調査旅行をベースにして『支那省別全誌』全18巻が書かれた。戦後のイデオロギー体質の時代に東亜同文書院のこういう成果は、ほとんどアカデミーの世界からはカットされてきました。とんでもないことだと思います。しかし、書院は非常に優れたデータベースを持っています。『支那研究』とか『現代支那講座』とか、『新修支那省別全誌』。これは20年経つてもう1回、資料がたくさん蓄積されたため新版として出したものですが、9巻で中止です。全18巻ありましたが、半分が戦争が始まって駄目になってしまったためです。

大旅行を指導した馬場先生も、卒業生がみんな枕にしたという大作、1,000頁を超えるような本を5、6冊出版しております。これは先ほどお話がありました『中日大辞典』。本間学長が愛知大学の時に中国政府に対して、「われわれはカードをたくさん作って発行しようとした。もしできるならば中日友好に役立つ」というので日本への返還をお願いした時に、当時の中国側のトップは周恩来首相ですが、郭沫若に命令してと言いますか、返してくれた。それをベースにして愛知大学では『中日大辞典』を作って、今年20年ぶりに第3版ができて、かなり割安で出ておりますのでぜひ興味のある方はまたお買い求めいただくといいんじゃないかなというふうに思います。書院時代に編纂が始まって70年になります。これも愛知大学の中国との関わりを示す、また書院との関わりを示す大きな刊行物です。先ほど申しました学生諸君のデータをベースにして編まれたのが『支那省別全誌』。言ってみれば省別の地誌ですね。

これは甘粛省の表紙です。当時、新疆省まで調査に行けなかったんですけど、簡単に紹介してあります。第2次の時にはこれが全面改訂になるんですけど、残念ながら戦争でストップしてしまいます。これが新修版ですね。今度は全1巻で新疆省がまとまります。雑誌のほうも『支那』という雑誌が毎月出されて、研究成果が載っています。さらに『支那研究』という、よりアカデミーな形になってますね。それから『東亜研究』。東アジア全体をカバーするような研究に広がっていく。これは大学に昇格してタイトルを変更していますね。

その他、研究書もありますけど、人名辞典類や『支那年鑑』というような基本的なデータベースに非常に貢献したと思います。全体では200冊を超えるぐらいの刊行物が出ております。宣伝臭いんですけど、これは私が、書院生の中国旅行記録をまとめたものです。学生諸君が書かれたものを活字に直している。大変読みにくいものですから活字にして、まあなかなか苦労したんですけどね。これは第2巻目です。今は第5巻目を編纂中です。

しかし、そうは言っても本当にどの程度調査をやったのかというわけで、私はそのチェックのために福建省の調査というものを選びました。なぜかと言うと、この班は海南島へ行く予定だったんですけど、香港まで来たら領事館からコレラが流行し治安も悪いから行くなと言われた。普通の書院生達はそれでもみんな行っちゃうんですけど、この班は従順に言うことを聞いて、じゃあと言ってこの辺をうろちよろして、最終的に何の予備調査もしてないこの福建省を調査した。したがって全く準備していない最悪の状況がどんなふうに記録されてるかを見れば、他はそれ以上によくできてるに違いないというわけでここに入った。その結果、当時の記録を見ながら観察していきますと、ほんとにほとんどパーフェクトに近いくらいよくできている。というわけで、この旅行記録の中へ入っていったわけですね。とくに旅行日誌はコー



ス沿いにいろいろ情報がありますので、細かいので省きますけど、いろんな人とか町とか物とか人口とか、どこに泥棒が出るとか、飢饉があるとか、いろんな情報がたくさんあります。土地利用がどうのこうのというのも入っております。いろいろ当時の中国の状況をこういので復元することができます。これもそうです。

細かいことは省きますけれども、こういう形で中国の本質的な部分、農村部を中心にした底辺の部分は今でも充分そのまま活用できそうですね。これは、12期生全員が通過した町の貨幣の種類を記録しています。それをまとめるとこんなにたくさんありました。統一通貨は当時の中国にはありませんでした。したがって、書院の人達は小銀を紐に括り付けて会計係の身体中に巻き付けて行ったのです。だから、会計係が一番身体が大変でした。それで両替をしながら各地で食料を買ったりいろいろしたわけです。その時の貨幣の種類がここに書いてあります。そうすると同じ貨幣のところは同じ経済圏というふうに見ることができます。こうやって地図化して工夫することができます。これは伝統的な経済圏と見ていいでしょう。今度は言葉。どんな言葉を話しているか。いろんな方言がたくさんあります。そうするとこれは同じ言葉を使う言葉の文化圏と言っていいでしょう。こういうようなまとまりを作ることができます。それを合わせると、経済的、文化的な二重構造なんですけど、それがうまくダブってくるとこれは強固な圏域、中国の中でも非常に基礎的な圏域を設定することができる。現実にも私も繰り返し中国に行きましたけど、やっぱりそういう感じがいたします。

これは阿片の栽培。そういう記録もあります。だいたい北西部ですね。戦時中には満州で関東軍が栽培させたというような話もありますけれど、伝統的にこういう乾燥畑作地帯。この山西省は、軍閥の袁将軍が一切阿片を栽培するなど言ったために、こちらの陝西省のほうが山西省のギリギリ

の黄河の向こう側まで阿片を集中的に栽培していたという面白い分布現象も出ている。これは土匪という強盗団の出没地。もともとは揚子江が氾濫して、農民が食い扶持を失って強盗団を組織した。戦争が始まって軍閥間の争いで敗れた人達が、省の境目ぐらいに出没して強盗団に変わる。したがって、省を越えての書院生の旅行というのはなかなか大変だったわけです。ある時は自分達を護ってくれた保衛兵の人達が突然強盗団に様変わりして、ある場所で突然、裏側から片目を失った親分が出てきた。その目がおかしくなっている。「じゃあまあ冥土の土産だ」と言って最後に目薬をさしてやったら大喜びをして、「お前達荷物は全部置いていけ、その代わり命は助けてやる」というようなのが旅行記の中にも出てきます。当時の中国の衛生状態がそのぐらい悪かったということでもあります。

数年前の反日暴動がありましたけれども、1915年でしたか、21か条条約とか。1925年に上海の日本の紡績工場でデモがありまして、それが町へ繰り出した時に、イギリス軍が無差別に発砲したというようなことがあって、排英排日排外という運動に広がっていきます。初の本格的なナショナリズムの波及です。これは九江の日清紡績支店が焼かれた時の写真です。それが旅行記の中で、出発したあと5月30日に上海で起こったわけです。大旅行は5月に出発して9月ぐらいまでに帰ってくる予定だったので、あっちこっちで出会った反日暴動の記録を集めてみますと、こういう分布図が出きます。

これは軍閥の勢力圏図としてあらわしたものです。瞬間的なものではありませんけど、軍閥間の勢力がどのぐらい広がっていたかがわかります。これは呉佩孚の勢力圏図。呉佩孚は途中で消えてしまうわけですが……。こちらは張作霖の勢力圏図。こういうようなのを瞬間的に描くことができます。これは四川省ですけど重慶。四川省を回りますと、知事は日本へ留学した人が多かった。中国

ではパブリックスペース、たとえば公園とか公会堂とか、公共の場になるようなものは伝統的にありませんでした。そういうのを都市計画のもとで図書館を作ったり、道路を広げたり、公園を作ったり。みんな日本へ留学した人達がこういうところの軍閥になって指導した。あるいは知事になって指導した。これは、そういうのが見られる町を描いたものです。四川省は軍閥が3人おりましたから、3人が競争してそういうものを建設し、整備した。つまり、近代化というのは軍閥の時代にもうスタートしていたのです。人民中国よりもっと早い時期に。これがむしろ、人民中国のモデルになったと言えるんじゃないかと考えられます。

山東省では軍閥が戦争ばかりやっているの、人民が徴発や重税に悩まされ、飢饉もあった。その時に、満州のほうから穀物が援助物資として送られて、満州へ行けば食べるだろうというわけで、山東省の人達が満州移民を始めた。まあ満州もロシアが南下してくるといって防衛線として空白地域を埋めたかったんです。というのも、満州族の多くは北京に移ってしまっていたからです。したがって漢民族を農民として、奥地へ入植させるというような政策が合致して、1920年代には毎年100万人ぐらいが満州へ入った。4月の春先に行って冬にまた少し帰ってくる。そういうのを書院生の記録の中から読み取ることができます。書院の人達もお金がなかったから、船に乗っても雨が降ると濡れてしまうデッキパーソンです。こういう人達もお金が無いからみんなデッキパーソンなんですね。そういう人達と接点を持ちながらの旅行記が多いので、その当時の様子がよく分かります。

これがたとえば、大連に上陸した人達がどこまで行ったのかを示した図です。ちょっと省きますが、そんなことも分かるんですね。これは北満ですね。北満には当時中国の人達がどのぐらい移民で入り込んでいったのか。この小さい丸が500人ぐらい。後に1930年代以降、今度は満蒙開拓団

という日本の農民達が送られてきて、空白地域へ入り込んでいく。一部にはそこで摩擦が当然起こるわけですが、まあかなり空いてました。そういうところへ、日本人が入り込んでいったわけです。

そうすると全体として中国の流れがこういうふうであって、1930年ぐらいからあとは大混乱の時代です。文化大革命もあって1980年には改革開放が始まりますね。そうすると、資本主義が1930年代までにここまで来たけれども不十分であると。中国は80年代以降、もう1回先ほどのお話のように資本主義体制でやっていくという時に、国家体制のレベルではともかく、小さな金融機関とか金貸しとかを含めて庶民体制では1930年代のものがいくつか残ってる。結局、1930年代へ接合しないとこれがうまくいかない。そういう作業と戦後の世界経済のグローバリゼーションの中での対応の仕方というのが、ここに新しく加わって近代化してくる。そういう点で言ってもこの部分、書院生が記録した20世紀前半期の詳細な、歩いて書いた記録は、卒論も含めて今日の中国を知る上で非常に重要だということがよく分かります。

最後の時代、戦争に負けて東亜同文書院が閉学をします。最後の院長が本間喜一という方で、日本へ帰ってから大学を作り、そこに書院生と教職員を入れようという構想を持つわけです。この方は最高裁の事務局長までやった方で、まあそういう点で言うと中央にも少しいろんな口があったのかも知れません。しかし、GHQの管理下で東亜同文書院という名前は使えませんでした。当時あった中国研究所も、中国という名前があるから駄目だと言われて、国際問題研究所という形で現在愛知大学に残ってます。この方は第1次大戦後のドイツの猛烈なインフレの時代に留学していた人ですから、その時の対応策をちゃんと身に付けてまして、上海でお金は全て金の延べ棒に変える、あるいは車に変えるというような形で、教職員達の給料を工夫したり、愛知大学の設立の工夫をし

たわけです。それで豊橋の町は焼けたけど、ちょうど郊外にあった予備士官学校が空いてるというわけで、そこをタッチの差で愛知大学が確保することができた。

3人の学長がおられますけど、本間先生が事実上資金の問題とかいろいろな問題を解決したわけです。しかしお金はともかくとして、施設もできたんですけど、本が無いと大学ができない。先ほどの東亜同文会の建物、つい最近まで文科省の隣の霞山会ビルの建物です。今は近衛さんの雅号名のビルのところに、中国から送られてきた副本、コピーが35,000冊あった。米軍がそこを接収するというんで、取られたらみんなアメリカへ行ってしまう。最後の学年は、東シナ海が米軍に狙われて渡れませんでしたから、富山県の呉羽紡の社長さんのお陰で、そこでキャンパスを開くことができた。そこの有志が急を聞いて、満員の鉄道に揺られて東京へ来て、前の晩に35,000冊の本をかきだして都内へトラックで運んで隠したわけです。

そういう点で言うと、非常にドラマチックな愛知大学開設の歴史があるんですね。その本と全国の古本屋（焼けてしまった店が多かったけど）から10,000冊を集めて、合計45,000冊で図書を整備して大学を申請した。終戦の明るる年の11月にはもう愛知大学が認可されたんですから、これはもう奇跡に近いほどのスピードですね。GHQの管理の下で。結局は大陸から引き揚げてくる人達の受け入れ機関を作らなきゃいけないんじゃないかなという政治的判断が、文部省の中にもあったんじゃないかと思うんですね。

最初は書院の人達中心でしたけど、後半はいろいろな大学からも入れなさいといった形で。先ほどの高井さんが頑張って、当時の方々の資料を集めていただいて、10月の31日かな、愛知大学の豊橋キャンパスですけど、いくつかの学校をピックアップしていただいて、初期の愛知大学を作った引き揚げ学生のシンポジウムを企画していただい

ております。そういう学校が全体で85大学と高等学校があるんですね。

これが今は記念館（記念センター）になりましたけれど、当時の愛知大学本館です。先ほどハルビン学院の写真がありましたけど、似たような写真ですね。学生さんと教職員。最初の頃はこういう形でした。これがその後ですね。これは本間院長が軍隊組織のグラウンドを、食料難でしたから畑にしたらいいかとか、こうしたらいいかなということ、詳しい方と相談している写真です。当時の学生さんを描いた絵が残っており、これはマントや帽子をかぶっていた当時の愛大生の様子ですね。

東亜同文書院大学閉学時ですけど、学籍簿を持ってきたんです。ボストンバッグ1個しか持ってこられない時に、本間先生が自分のご家族とか事務職の方とかいろいろな方に手分けして、たくさん量ですね、成績簿と合わせて全部を持ってきました。外地にあった学校でこういうものを持ってきたのは書院だけです。したがって、書院が無くなってしまったんだからと、自称書院卒業生という人がけっこう、履歴書偽称でたくさん出まして、私のところにもずいぶん問い合わせがありました。「へえ、こんな有名な人もそう？」なんて言うぐらい、びっくりする人もおりましたけど、まあみんな偽物でありました。しかし、同級生がみんな名前と顔をよく知って仲間意識が強いですから、ごまかすのは難しいでしょう。これは『中日大辞典』。カードが返されて編集をしている様子です。

その後の日中関係。両国に竹のカーテンがある時代にも、愛知大学はそういう点で中国と交流ができたわけです。その後、ベルリンの壁が崩壊した直後ぐらいにいろいろな新聞が、書院に注目していただいて、NHKも45分の特集番組を組んでくれました。これはある新聞社の特集ですね。こんな形でいろいろ世の中に出していただいた。そういうのも大変われわれにとってありがたかったわ

けです。今日こういう会合が開けるのも、こういうことが背景にあります。そして昨年は欧米研究者から見た東亜同文書院。フランスの研究者、アメリカの研究者を呼びました。中国の研究者が見るとまたガラッと変わるんですね。非常にグローバルな視点で見ている。そういう点では、書院というのは世界中がある意味で注目してるんですね。国内ではイデオロギーで東亜同文書院の成果は1つも戦後の中国研究用の参考文献書の中から見つかりませんでしたけど、海外の人はいっぱい引用しているわけです。日本と欧米とのギャップがずいぶんたくさんあったなという気がします。しかし、これからはそういうのをわれわれの手で、愛知大学の、というんじゃなくて、グローバルな、全体の中で書院というものを中国研究と併せて出していきたいなと思います。京都でこういうふうにするのも、全国各地を回ったのも、そういう意味があります。愛知大学だけでなく、日本で1つの中国研究の共通財産として出していないかということです。

現在、われわれの愛知大学へ来ていただきますと、このような展示施設を見学することができます。今日はほんのわずかしか持って来られませんでしたけれども、興味のある方はぜひ本学のほうへ。火曜日から土曜日、朝10時から夕方4時半ぐらいまで、入場料はもちろんタダでやっておりますので、ぜひご覧になっていただくといいですね。中国、台湾の方々も来られますとみんなびっくり仰天されます。特に孫文関係はたくさん展示していますので、実物をこんなふうにみんなにさらしてはいけないとずいぶん忠告を受けました。なぜか。「取られたらどうするんですか」ということです。おかげでいくつかレプリカを作らせていただきました。われわれはある程度レプリカで展示を行なっていますが、荒尾先生の書かれた揮毫を今朝三田さんが来られて寄贈していただきました。実物も展示してありますので、また後でご覧になっていただくとありがたいですね。

これは民国政府ができた時のトップの人達です。20周年記念のお祝いに書いていただいたものです。こちらは山田兄弟のコーナーであります。スパイの暗号表が珍しいことに残ってました。そんなものも展示してあります。というわけでぜひ、チャンスがありましたら豊橋へ。新幹線ひかりも時々は停まりますので、降りていただいて、記念センターを覗いていただいたら大変ありがたいということになります。

だいぶ走りましてまことに申し訳ありませんでしたけれども、以上で発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】 ご質問があれば、はいどうぞ。

【参加者】 つまらん質問かも知れませんが、今の人間は文字を書く場合、左から右に漢字を書きますね。昔の人は逆ですね。右から左に全部書いてますね。昔の人間はこうしか書けなかった。今の人間が書く場合、こうしか書けないようになるということは、やっぱりこれは癖なんですかね。

【司会】 そのお答えは、三田さんどうですかね。おられませんか…。はい。じゃあ。

【前田】 44期の前田と申します。愛大の小田君と同期です。愛知大学でいろいろ中国の研究をなさっておられると思いますけれども、交通大学が日本の大学と友好関係を結んだり、大阪大学を始めいろいろな大学と交流してますけれども、愛知大学としてももうちょっと上海交通大学との交流を進めていただいたら如何かと思います。それについて実は私、上海交通大学に5、6回留学しまして、向こうの先生方と教室で仲良くなりましたんですけども、東亜同文書院でのことについて、上海交通大学の校史研究室というのがありまして、学校の歴史を研究している。それで6年間東亜同文書院を研究していて、そのことについて歴史を書いたわけですが、同文書院はスパイ学校じゃないかという説がかねがねありまして、疑いがなかなか晴れない。それを晴らすためにはいつ

たいどうしたらいいかと思って、私も呼ばれて校史研究室の主任教授とかといろいろお話ししたんですけれども、現在北京におりますシン君（中国の人民日報の東京支局長をしてた）とか、上海外大の名誉教授のオウ君とか呼ばれまして、同文書院はスパイ学校ではないということを盛んに説明してるわけですが、「その資料は愛知大学の東亜同文書院研究センターに行ったらあると思う。そこでよく調べてもらえば昔のことがよく分かるから」ということは申し上げただけど、残念ながらその辺のところももう1つ徹底してないような気がいたしますので、ぜひ交流を進めていただきたいと思います。以上です。

【司会】 はい。今の後半の件に関しましては、われわれは交通大学の校史研究室の方々と共同研究を3年か4年間ずっとやりました。それで上海と愛知大学でシンポジウムを開いたりして、かなりそれは進んでおりまして、若い研究者もわれわれのほうにお呼びして資料の研究等をしていただいたりしています。

【前田】 東亜同文書院記念基金記念賞をもらった教授がおられるそうですね。

【司会】 今年、校史研究室の教授が受賞されました。そういうふうに進んでおりますので、今後の発展は今日は学長もおられますので。

それから先ほどの書き方の質問は三田さんがお

られると。おられますか、今。何かお答えございます？

【三田】 たぶん、タイプライターの影響があると思いますけども。そういう横書きの影響が日本にも自然に移ったんじゃないでしょうか。中国では昔からみんな右から左へ書きましたからね。それがアメリカはみんな左から右へ、英語の場合は書くようになってます。本も自然にそういうふうになってるので、そういう影響を受けてだんだん左から右へ書くようになったんじゃないでしょうか。中国では現在出ております本はもうみんな、左から右へ書くようになってます。

【参加者】 アラビア文字はみんな逆に書いてるでしょう。私の父親なんか、こう（左から右へ）書くことはできませんでしたね。こう（右から左へ）書きましたね。

【司会】 まあおそらく今もお話しになったように、戦後英語がずいぶん入ってきたり、横書きをするようになった時に、やっぱり左から右というような形になってったんじゃないでしょうかね、はい。だから、古い資料はみんな右書きになりますから、ややこしいですね、確かに。今、三田先生のほうは日本の漢字を中心にした短歌の方です。まあおそらくそういうことかなと思いますけど。私もちょっとそれ以上は分かりませんので。